

# ヒロシマと歴史家

——修正主義の興亡

〔訳者備考——麻田貞雄〕

ここに訳出したマイクル・コートの「ヒロシマと歴史家——修正主義の興亡」は、現在アメリカでもっとも白熱化している歴史論争の一つ、原爆投下問題をめぐる史学史的エッセイである。この論争で「正統主義派」と呼ばれる学派は、「日本に原爆が投下されたのは、日本を早期に降伏させる軍事的目的のため」と主張する。これに対し「修正主義派」は、「ソ連を外交的に脅迫・牽制する政治的目的のために投下された」と弁ずる（混乱を避けるため、私は日本における後者の解釈を「原爆外交説」と呼ぶことにする）。本論文の題名からして

ヒロシマと歴史家

マイクル・コート  
麻田 貞雄 訳

も明らかように、コートは「正統主義」もしくは「反修正主義」の立場をとっている。

日本では「原爆外交説」が（学界はいうにおよばず、メディア、学校の歴史教科書などで）圧倒的に有力であり、それが「主流」「正統的見解」となっている。したがって、「原爆は日本の降伏を早めるために使用された」あるいは「日本の降伏を早めた」と発言すると、原爆投下の肯定もしくは正当化になると非難される。

しかし、日本における「原爆外交説」は、実はアメリカの「修正主義」をそっくりそのまま直輸入して、十年一日どころか、五〇年一日のように無批判に繰り返してきたのである

同志社法學 六〇巻六号 四七一 (二九〇七)

る。一方アメリカでは、コート論文が示すように、国立公文書館やトルーマン大統領図書館で新しい資料が発掘されるたびごとに、原爆投下論は絶えず精力的に書き直されているのである。そして、コートによると、アメリカでは「修正主義」史観は新しい実証研究の挑戦を受け、いまや「衰退」の危機に立たされているという。これと比べて、日本の歴史家はいつまで後生大事にアメリカの旧説にしがみついているのだろうか？「原爆外交説」が「通説」として、今でもまかり通っているのは、私の知るかぎり、日本の学界とメディア、ロシアの公式歴史家、それに近年力を弱めつつあるアメリカの「修正主義」の歴史家くらいのものであろう。

断っておくが、私はコート論文に全面的に賛同するものではない。彼は複雑な原爆論争を「正統主義派」と「修正主義者派」とに二分するが、両派の説を折衷した研究も少数ながら見られるのである。程度の差こそあれ部分的に「修正主義」を取り入れた解釈を「穏健な修正主義」として括ってしまうと、微妙な相違点やニュアンスが見失われてしまう危険がある。また、コートは自分が賛成しない論者に総じて「修正主義」のレッテルを貼りがる傾向がある。さらに二〇〇年、三〇年と経つうちに立場や見解を変えてきた歴史家もいる\*。

欲を言えば、こうした複雑な陰影をも射程に入れた、より立体的かつ複合的な論争史を期待したかった。しかし、一つ彼のために断っておくと、コート論文は日本の研究者には、

原爆投下肯定論のように見えるかもしれないが、本論文における彼の狙いは、原爆の道徳的な正当化ではない。

以上のような問題点があるにせよ、コート論文が幅広い史学史の形をとりながら、ごく最近に至るまでの研究を綿密に紹介し、「反修正主義」の立場から活発な論戦を繰り広げていることを評価したい。停滞どころか、思考停止の状態にある日本の原爆投下論争に新風を吹き込む一助となればと願い、コート論文の訳出を思い立った次第である。コート自身の原爆投下論と、彼の選んだ基本的資料については、Michael Kort, *The Columbia Guide to Hiroshima and the Bomb* (New York: Columbia University Press, 2007) を参照されたい。

\*たとえば、バートン・バーンスタイン (Barton J. Bernstein) の一連の論文は、原爆は主として日本の早期降伏のための兵器であったが、同時にソ連に対する政治的示威という「ボナナス効果」(おまけ)もあつたと主張する。

また、ハーバート・フェイス (Herbert Feis, 歴史部門でピューリッツァー受賞) は *Japan Subdued: The Atomic Bomb and the End of the War in the Pacific* (1961) では「正統主義」の立場だったが、五年後の *The Atomic Bomb and the End of World War II* では「トルーマン大統領とその助言者は、原爆の使用が戦後ソ連に「もつと自制するよう影響力を与えることはできないかと考えた」可能性について「推測」している(ただ、フェイスは「原爆による恫喝」は否定している)。さらに、初期のマーティン・シャールウィン (Martin

J. Sherwin) の *A World Destroyed: The Atomic Bomb and the Grand Alliance* (1977) は、原爆投下の主要な要因として軍事面を、副次的な要因として国際政治面を検討しているが、のちほど過激な「修正主義」に転じた。

より新しいものでは、ウォーカー J. Samuel Walker の *Prompt and the Uter Destruction: Truman and the Use of Atomic Bomb* (1987) (林義勝監訳『原爆投下とトルーマン』彩流社、二〇〇八年) が典型的な折衷的解釈である。

\* 本文においては、なるべく原題に忠実な訳題を付したが、注においては訳者の付した題名のままにしておいた。

「根本的に誤った見解やアイデアが時折あらわれるものだ」。

傑出したトルーマン研究家のロバート・H・フェレルはその著『ハリー・トルーマンと冷戦修正主義者たち』(二〇〇六年)の中でこう述べたが、彼が非難したのは、トルーマンの外交政策が冷戦を引き起こすうえで最たる責任があったと、過去半世紀にわたって批判してきたアカデミックな歴史家の多数の集団であった。フェレルの本の題名が示すように、これらの歴史家は「修正主義者」として知られる。これと対照的に、トルーマンの外交政策を一般的に弁護してきたものは「正統主義派」と呼ばれる。「正統主義派」対「修正主義派」の論争において、第二次世界大戦末期に原子爆弾を日本に投下したトルーマンの決

定ほど白熱した論戦をまきおこした問題はない。この論争において「根本的に誤った」アイデアとは、原爆の使用は軍事的に正当化されなかったという修正主義者の主張である。この主張はいくつかの構成要素から成り立っているが、個々の修正主義歴史家は一概にそれをすべて信奉してきたわけではない。もっとも重要な説によれば、一九四五年八月に日本を降伏に追い込むには原爆は必要でなかったのであり、そのことをトルーマンはよく知っていたという。大統領は軍事的理由から原爆を日本に対して使用したのではなく、ソ連に対する外交的武器としてそれを用いたのであり、それが冷戦の起源に主要な役割を果たしたのだと修正主義者はいう。そして戦争終結後、原爆投下を正当化するために、トルーマンは、計画されていたアメリカ軍の日本本土上陸の際に推定された死傷者の数を、数万から数十万に膨らませた、と修正主義者は論じたのである。

修正主義説を全面的もしくは部分的に支持する本や学術誌の記事が大量にあらわれたにもかかわらず、それを裏付ける説得的な証拠はなく、逆に圧倒的な量にのぼる資料は、その反対の解釈を示している。にもかかわらず、修正主義者の議論は一九六〇年代の半ばから一九七〇年代の初期にかけて、研究者の間で広く受け入れられ、一九九〇年代に入ってもまだ一般の通念(ドクマといっても言い過ぎではない)であり続けた。しかし、一九九〇年代を通じて、先駆的な一連の書物や論文があらわれるようになる。その著者の何人かは大学の象牙の塔の外で研究し

ていた歴史家であつたが、彼らは疑う余地なく修正主義がいかに間違っているか論証したのである。しかし、トルーマンの原爆投下決定に対する修正主義派の批判が信用を落としてしまったということは、本稿の（ほとんどではなくても）多くの読者にとって、おそらく驚きであろうと思われる。

### 初期の論争

原爆の対日使用をめぐる論争は、一九四五年八月までさかのばる。トルーマンの最初の批判者たちは、広島・長崎の原爆投下の直後、実に日本が九月二日に正式に降伏するに先だつて、すでに批判を表明していたが、彼らは主として平和主義あるいは宗教的な原則に即して批判したのである。これとは違った種類の議論が、一九四六年の半ば『サタデイ・レビュー・オヴ・リテラチャー』誌上にあらわれた。そのなかでノーマン・カズンズとトーマス・K・フィンレターは、合衆国が日本に原爆を投下したのは、戦争終結のための軍事的武器としてではなく、東アジアにおけるソ連の勢力を抑制するための外交的武器としてであつた、とアメリカを批判した。したがって、年代順にみればヒロシマ「修正主義」は、「正統主義」より先に登場していたのである。<sup>③</sup>

一九四八年、イギリスの物理学者、ノーベル賞受賞者、親ソ的なマルクス主義シンパであつたP・M・Sブラケットはその

著『原子エネルギーの軍事的・政治的結果』の中で、より包括的な修正主義の解釈を展開したが、そのアメリカ版は若干の修正をほどこして『恐怖、戦争、そして原爆』として出版された。ブラケットは、日本は原爆なしでも、ソ連の対日参戦（八月八日「日本時間では九日払曉」、広島原爆の二日後、長崎原爆の一日前）なしでも一九四五年の末までに降伏していたであろうと論じた。彼の所説は、一九四六年七月に発表された合衆国戦略爆撃調査団の『要約的報告（太平洋戦争）』の結論に依拠していた。この調査団の報告では、アメリカが通常爆撃を継続していたならば、「もし仮に原爆が投下されなくても、またロシアが参戦しなかったとしても、さらに本土上陸が計画もしくは予期されていなくても」、日本は「確実に」一九四五年一月三十一日までに、そして「おそらく」一月一日までには降伏していたであろうと述べていた。後述のように、ブラケットの断定的な言明は、一九六〇年代の中葉ヒロシマ修正主義者の論陣の中で一つの魔術的な地位を占めるべく運命づけられ、その後三〇年間にわたって影響力をもちつづけたのである。後述のように、ついに一九九〇年代の中葉になってから、何人かの歴史家が戦略爆撃調査団の集めた証拠、とりわけ日本の当局者の尋問記録を綿密に調べたところ、その結論が同調査団の尋問記録と矛盾していることを発見した。いずれにせよ、「原爆の投下は第二次大戦の最後の軍事的行為というよりは、いまや進行しつつあるロシアとの外交的冷戦の最初の主要な作戦である」とブラケット

が断言したとき、ヒロシマ修正主義に今一つの魔術的なスローガンを与えたのである。

ブラケットの議論は、当時アメリカで支持するものがほとんどいなかった。一九五〇年代末期と六〇年代のはじめ、初期の修正主義者の議論は、顕著な左翼歴史家ウィリアム・アップルマン・ウィリアムズとD・F・フレミングによってそれぞれのアメリカ外交論に部分的に取り入れられた。前者は一九五九年の『アメリカ外交の悲劇』(一九五九年)、後者は『冷戦とその起源』(一九六一年)である。<sup>5)</sup>しかしながら、修正主義の主張は資料の裏づけを欠いており、アメリカの一般読者や学者の見解に重要なインパクトをあたえなかった。

そのかわりに、いわゆる正統主義派の立場が支配的であった。奇妙なことに、ヒロシマをめぐる「正統主義」は、トルーマンの決定にたいする初期修正主義者の批判に対する反応として登場した。正統主義派の議論が最初に活字になってあらわれたのは一九四六年二月、MITの総長カール・T・コンプトンによる『アトランティック・マンスリー』誌の記事であり、そして一九四七年二月に『ハーバーズ・マガジン』誌にあらわれた、より包括的で説得的なヘンリー・L・ステイムソンの論考であった。一九四〇年から一九四五年末まで陸軍長官の要職にあったステイムソンは、原爆はなるべく迅速に日本の降伏をもたらし、アメリカ軍の死傷者を最小限にとどめるために最善の方法であり、原爆はその目的のために使用されたとい

う、正統主義派の基本的な立場を開陳した。一九四八年、彼はこの最初の議論を自叙伝『戦時と平時に服務して』の中でさらに強力に展開した。<sup>6)</sup>

一九五〇年代の中期から一九六〇年代の初期にかけて、何人かの著名な学者が正統主義派の立場を支持したが、とりわけ軍事史家ルイ・モートンとハーヴァード大学名誉教授サミュエル・エリオット・モリソンがあげられる。<sup>7)</sup>次に、ピューリッツァー賞受賞の歴史家ハーバート・フアイスが、『日本屈服——原爆と太平洋戦争の終結』(一九六一年)を著して、ステイムソンの立場に賛同した。もつともフアイスは、海上封鎖と通常爆撃を組み合わせれば、戦争を一九四五年末期に終わらせることができたという戦略爆撃調査団の一九四六年の結論を受け入れはした。しかし、より根本的に、フアイスは、原爆を使用するという決定は「絶対重要と考えられた一つの理由により支配されていた」と主張する。すなわち、原爆の使用により、「戦争の苦悩をもつとも迅速に終わらせ、多数の人命が救われるであろう」という理由であった、とフアイスは強調する。さらに彼は、八月六日までにアメリカの指導者は、日本本土上陸の際にはアメリカは「何十万」の死傷者を出すであろうと恐れ、彼らを「原爆の使用に駆り立てた理由は軍事的、すなわち可及的速やかに戦争を勝利のうちに終わらせることにあった」と付言した。<sup>8)</sup>一九六六年に『原爆と第二次大戦の終結』の題名で出版した改訂版では、フアイスは、トルーマンと彼の何人かの助言

者は、原爆の使用が戦後ソ連の行動に影響を与えることを望んでいたかも知れないと示唆したが、この点に関する数少ない言及では、彼は「かもしれない」「おそらく」「多分」といった修飾語により文意を薄めているので、単なる憶測に終わっている<sup>9)</sup>。

一九六五年から一九六八年にかけて、一次資料や広範なインタビューに基づく本が三冊あらわれたが、いずれもトルーマンの決定を支持するものである。研究肌のジャーナリストであるレオン・ジオヴァニッティとフレッド・フリードによる『原爆の決定』、歴史家ウィリアム・クレীগによる『日本の降伏』、そしてレスター・ブルークス（アメリカの対日占領中マッカーサーの総司令部に勤務した）による『日本降伏の裏面——帝国を終わらせた最後の闘い』である。『日本降伏の裏面』には東郷文彦（茂徳の女婿）による短い序文と推薦の言葉がある<sup>10)</sup>。

他方、比較的初期に、ロバート・J・C・ビュートーの『日本降伏の決定』（一九五四年）があらわれたが、それは戦争最後の一年間における日本の政策決定に関する画期的な研究であり、今日に至るまで非常に貴重できわめて権威のある作品である。この本になかで、ビュートーは広島・長崎の原爆が決定的に重要だったと強調し、ソ連の参戦とあいまって、原爆により東京の政治的行き詰まりが打開され、降伏の決定がもたらされたと強調したのである<sup>11)</sup>。

### 修正主義の台頭と「原爆外交説」

正統主義派のコンセンサスは、一九六〇年代の中ごろヴェトナム戦争の激化を背景に攻撃をうけることになった。原爆論争の性格を（少なくとも研究者のサークルで）変え、トルーマン批判に向けるうえで最も力があつたのはガー・アルペロヴィッツの『原爆外交——ヒロシマとボツダム』（一九六五年）であつた。アルペロヴィッツは、原爆は軍事的理由ではなく外交的理由により使用されたと主張することによって、アメリカの原爆使用に対して直接の攻撃をしかけた。すなわち、原爆使用の真の標的は、実際に投下された日本ではなくて、当時アメリカの同盟国であつたはずのソ連であつたというのである。具体的に、アルペロヴィッツは、一九四五年の夏、もし天皇の保持を許される条件でなら日本は降伏する用意があつたと論じ、トルーマンとその最高助言者はそのことを知っていたが、故意にその条件を拒否し、そのかわりに無条件降伏を要求して、終戦への日本の努力を無にしたと論じ立てた。アルペロヴィッツによれば、広島・長崎に原爆を投下するうえで、ワシントンには「二つの最優先の考慮」があつたという。すなわち、①極東ではソ連に対日参戦させず、極東におけるソ連の戦後の勢力拡大を制限すること、そして②戦後東欧におけるソ連の要求を緩和させ、アメリカの要望に沿うようソ連に圧力をかけること、がアメリカの最優先事項であつたという。このアメリカの「原爆外交」こ

そ、冷戦を引き起こしたのだとアルペロヴィッツは主張するのである。<sup>12)</sup>

『原爆外交』は読みやすい本ではなかった。ヒロシマ原爆に関する頑強な修正主義と呼ばれる立場を展開するにあたり、アルペロヴィッツは二七五ページの本文に一四〇〇以上の後注を付した。多くのパラグラフではほとんど一センテンスごとに一つの注を、多くの場合には二つも注をつけている。しばらく読んでみると、この注の大部分は、本文そのものに到達するまでに叩き落す必要のあるハエの群のようにみえてくる。にもかかわらず、『原爆外交』は注が非常に多く、その密度が高いということだけで、学術的な見せ掛けをつくり、多く読者を印象づけたのである。そして、賛否両論の書評によって迎えられた本ではあったけれども、この本は結構多くの政治的左翼の歴史家によって熱狂的に歓迎されたので、ついには、ヒロシマへの原爆投下の決定を擁護しなければならなくなる立場に「正統主義派を」追いやってしまった。発言力のある、いくつかのサークルでは、『原爆外交』はただちに偶像の地位を占めるに至った。

しかし、こうしたアルペロヴィッツ熱は、はき違えだった。顕著な冷戦修正主義者をも含む何人かのコメンテーターは、アルペロヴィッツが自分の主張をバックアップする証拠をまったく欠いている、あるいは自分のあがる乏しい証拠では到底支持できない主張をしていると指摘した。やがて二、三人の歴史家

がアルペロヴィッツ批判をもっと深くほりさげた。そのもっとも注目すべき包括的な議論は、ロバート・ジェームズ・マドックスの『原爆外交』批判で、それは一九七三年にあらわれた。彼はアルペロヴィッツの脚注が信用できないことを暴露した。たとえば、彼は、アルペロヴィッツがトルーマンの重要な声明の文脈について読者を誤解させたと指摘している。すなわち、アルペロヴィッツは、トルーマンが一九四五年四月、もしソ連がポーランド政権の構成をめぐって譲歩しないならば、ソ連は「くたばってしまえ」と述べたと読者に伝えるが、関連する一次資料を正確に読むと、トルーマンは、スターリンが東欧で自己の主張を通さなければ、ソ連が国際連合樹立のための会議をボイコットする可能性に言及し、その場合には、ソ連がボイコットして他のところに「行つて」いるあいだに、アメリカは会議を進めると述べただけであることが分かる。マドックスはまた、アルペロヴィッツが省略符号(……)を用いてトルーマンの言明の意味を変えてしまったと説得的に論証した。たとえばマドックスは、原爆をめぐるジェームズ・バーンス国務長官の言明にトルーマンが言及したさい、アルペロヴィッツが重要な言葉を削除していることを示す。すなわち、アルペロヴィッツは、バーンスは対ソ外交的武器として原爆の使用を論じていると示唆するが、(……)によって削除された言葉とそれに続くトルーマンの文章を読むと、バーンスが「戦争の終結時に」日本に敗戦条件を押し付けるために原爆を使用することに言及し

ていたことが明らかになる。マドックスはこれに類似した数多くの歪曲の例が『原爆外交』を通じて見られると付言し、そのような理由で、アルペロヴィッツの本が「歴史研究への貢献と考えられること」に対して、「当惑する」と述べたのであった。

その致命的な欠陥にもかかわらず、『原爆外交』は大きなインパクトがあった。多くの修正主義者たちですら、アルペロヴィッツの対日原爆投下に関する基本的な陰謀説からしり込みしたが、彼らはアルペロヴィッツのアイデアを部分的に借用して、第二次世界大戦中および戦後初期のアメリカ政策に関する自身の批判を組み立てた。マーティン・シャーウィンの『破壊された世界——原爆と大同盟』（一九七五年）は、このアプローチの注目すべき例であった。シャーウィンは、原爆投下の主たる動機が最少限の生命の犠牲で迅速に戦争を終わらせることにあったとし、ぶ認め、その点ではアルペロヴィッツと意見を異にしたが、同時に彼は原爆投下の決定に反ソ外交考慮が深く関わっていたと述べた。彼は、反ソ外交的なこの「副次的考慮」が原爆投下の決定にどの程度の影響を及ぼしたのか精密に見定めようとしても、「明確な回答は不可能である」と付言した。

一九七〇年代のころ、アルペロヴィッツ説よりは穏健な研究ではあったにせよ、修正主義者による出版はさかんで、それは一九八〇年代にも続いた。アルペロヴィッツ説の本体は、退けられたにせよ、原爆外交説を構成する個々のアイデアは、論

戦で勝利を収めているようにみえた。多くの学者は、アルペロヴィッツのテーゼを全体として退けながらも、広島原爆およびトルーマンやステイムソンの事後の弁明を批判し、その批判の中にアルペロヴィッツの個々の見解をとり入れた。修正主義者の立場は、無数の形と色で織りなされた幅広いタペストリーになったのである。修正主義の議論をいくつかの点で修正もしくは敷衍した本で、好評を博した研究が何冊もある。すなわち、グレッグ・ハーキンの『勝利の兵器——原爆と冷戦、一九四五—一九五〇年』（一九八〇年）、ロバート・メツサラーの『大同盟の終焉——ジェームズ・F・バーンズ、ロースヴェルト、トルーマンと冷戦の起源』（一九八二年）、マイクル・シェリーの『アメリカ空軍力の興隆——最後の大決戦』（一九八七年）、そしてレオン・シーガルの『徹底抗戦——合衆国および日本における戦争終結の政治』（一九八八年）がこれに該当する。ハーキンの主たる関心は戦後期、一九五〇年までであったが、彼は「原爆外交の最初の真の試みはボツダム会談においてであり」、ソ連に対して外交的利点を得るために原爆を使用するというアメリカの最初の努力は「無惨にも失敗した」と主張した。メツサラーは一九四五年に絞り、ジェームズ・F・バーンズ國務長官を取りあげて、基本的にハーケンと同じ結論に達した。シーガルは、トルーマンの何人かの最高軍事顧問が原爆の対日使用に反対したこと（この主張は戦後のメモワールにもとづいているが、戦時中の証拠はない）、さらに広島・長崎への原爆投下は日本の



降伏を強いるうえで決定的ではなかったと論じることにより、修正主義の特定の局面を支持したのであった。<sup>15)</sup>

他方、アルペロヴィッツは『原爆外交』を拡大して一九八五年に増補改訂版を出したが、その新しい部分は、六〇ページにおよぶイントロダクションであった。修正主義者たちのあいだの相違点が何であろうと、一九八〇年までに彼らは、原爆は一九四五年八月に日本を降伏に追いやるために必要ではなかったこと、そしてアメリカの本土上陸作戦の場合、何十万という死傷者が出たであろうという、トルーマンの戦争中の主張を裏付ける証拠は何もないという点で見解が一致していた。しかし、この見解一致を越えるとなると、修正主義者たちの描いたシナリオは異なっていた。ライリ・A・ローズはその『疑わしい勝利——アメリカと第二次世界大戦の終結』（一九七三年）の中で原爆外交説を強力に否定したけれども、日本は上陸作戦がなくとも降伏したであろうと論じた。バートン・バーンスタインは一連の学術論文のなかで、トルーマンは主として日本に降伏を強いるために原爆を使用したと論じた。この点ではバーンスタインは正統主義派の解釈の重要なポイント受け入れたのだが、しかし彼は、アメリカの政策決定者にとって、原爆の使用がソ連から戦後の外交的譲歩を得る助けになるので、原爆には「ポナース効果」があったと示唆した。と同時に、彼は本土決戦がなく、原爆投下がなかったとしても、一九四五年中に日本に降伏を強いることができたという点では修正主義者に同意し

た。また彼は、トルーマンとスティムソンは戦後になって原爆の使用を正当化するために、本土上陸作戦で予期される死傷者の推定数を誇張したと主張した。その後二〇年の間、バーンスタインは一般に穏健な修正主義のもつとも著名な主唱者としての自らの地位を確立し、そしてとりわけ、アメリカ軍の死傷者数を低く推定する説をリードしたのである。<sup>16)</sup>

### 正統派の復活

修正主義派の全盛時代は一九八〇年代、そして一九九〇年代の初期まで続いた。その後になると、原爆投下をめぐる史学史の論争は変わり始めた。一九九〇年代になると、これまで使用できなかった資料にもとづく新しい一群の研究が現れはじめたが、これらの新研究は、多くの修正主義者の議論を論破するものであった。これら修正主義者の議論は、一九四五年、アメリカは原爆を対ソ外交の武器にしたという主張、原爆が使用されなくても、予定されていた本土上陸の以前に日本は降伏していたであろうという議論、そして上陸作戦と日本に最終的降伏を強いるために必要と見積もられていた推定死傷者は、原爆の使用を支持した指導者のいうよりも少なかったであろうという主張、であった。これに対し、新しい研究書や学術論文を著した歴史家は、アメリカの対日原爆使用を強力に支持する論拠を提供する。そしてその過程で新しい研究は、さまざまな修正主義

論の立場の支柱を打ち壊してしまつたのである。

こうした新研究の最初のものは、日本語の達者な軍事史家エドワード・J・ドゥレーによる『マッカーサーのウルトラ——対日戦争における暗号解読、一九四二—一九四三年』である。ドゥレーの焦点は原爆投下そのものではなく、「ウルトラ」と呼ばれる太平洋作戦でのアメリカ陸軍による日本軍の暗号解読であり、それは一九四四年に始まり、ダグラス・マッカーサー総司令官が南西太平洋地域で日本軍と戦闘するうえで非常に貴重な情報をもたらしたのである。「ウルトラ」電報は一九七〇年代中頃まで機密を解除されなかったのだが、その電報は外交機密の解読（「マジック」とともにホワイト・ハウス要人を含むワシントンのトップの政策指導者のもとに毎日届けられた。「ウルトラ」情報が六月下旬から七月末にかけて示したところによれば、九州では予想を越える規模にまで日本軍が大々的に増強されているということであった。九州上陸は十一月一日に予定されていた、二段階からなる日本上陸作戦の最初の段階（「オリンピック」と呼ばれた）であった。（第二段階は「コロネット」と呼ばれ、一九四六年三月に予定されていたが、それは関東平野への上陸を目指すものであった。日本上陸計画は総体的に「ダウンフォール」と名付けられた）。日本軍の増強は、日本が最後まで徹底抗戦する決意であることの証拠であるのみならず、日本上陸の場合に予想されていたアメリカ側の死傷者についてのアメリカ軍部の以前の推定数を覆すものであった。

「ウルトラ」は、八月初旬までに九州における日本の守備軍は、以前アメリカが予期していたものの、ほとんど二倍に達することを示していた（実際には、ウルトラ情報は日本軍の数を三分の一ほど過小評価していた）。そして「オリンピック」作戦は「きわめて被害が大きい」とされたのである。<sup>19</sup>このようにドゥレーの提示した証拠は、修正主義者の議論の二つの重要な論拠を覆してしまつた。第一に、日本は一九四五年の夏、降伏を真剣に考慮していたという説、そして第二に、修正主義者が示す低めの死傷者推定数はすべて、アメリカの軍事計画者が九州における日本軍の増強について知られる以前の数字であり、ワシントンにおけるトップの軍事的決定は以前の低めの死傷者の推定に基づいていた。この二点によつて修正主義者の重要な論拠が覆されたのである。

一九九三年、原爆論争は大学の研究者や学者が、関心ある幅広い層の人々と公の席で論争しなければならなくなつたとき、これまでとは違つた白熱した様相を呈するようになった。この激論の原因は、ワシントンにあるスミソニアン国立航空宇宙博物館（NASM）で、原爆投下の五〇周年を記念してヒロシマ原爆の展示を提案したことである。NASMの学芸員たちは修正主義者の研究に大きく依存したが、明らかに彼らが驚いたことに、その原爆投下のストーリーは挑戦を受けずにはおかつた。展示の台本が一般に公開されるや、NASMは原爆投下の決定とその結果について偏つた提示をしているという非難を

受けた。論争の焦点は原爆投下の行われた文脈についてであった。とりわけ、二つのポイントが批判者の鋭い攻撃的になった。第一に、NASMの最初の台本は、アメリカの対日戦争を「復讐のための戦争」と呼び、他方、日本人は「西洋の帝国主義から自らのユニークな文化を守るための戦争」を闘っていたのだと述べた。第二に、NASMの展示が原爆による日本人被害者の苦悩に重点をおき、その反面、東アジアにおける日本の侵略戦争とその残酷さや破壊性を十分に強調していない、と批判者たちは論難した<sup>20</sup>。退役軍人の集団である空軍協会はNASMの台本を批判するうえで顕著な役割を演じたが、それは多くの批判者の一つにすぎなかった。

アカデミックな歴史家は賛否両論にわたり論戦に参加した。展示を弁護する修正主義派の学者にいわせると、争点は、一次資料にもとづく（彼ら自身の）学問的研究と、それを中傷する人々（その多くは年老いた戦争ヴェテランたち）の感情的な反応、との対立だったという。修正主義者は、NASMの批判者たちが正当な学問研究を檢閲しようとしていると抗議したが、この抗議はNASMの台本の所説と矛盾する研究が存在することを無視した議論である。NASMの諮問グループの一員であった、あるアカデミックな研究者は、両者の相違点は「記憶と歴史」のあいだの違いだと示唆した。つまり、「記憶」は老いつつある感情的な退役軍人の心情を映し出し、欠点のある色うせたものであるのに対して、「歴史」は公平で最新の研究にもと

づくものだと主張するのである。この主張が自分の立場を擁護するための一方的な議論であるかどうかは別として、「記憶と歴史」というキャッチフレーズは修正主義者の間で流行り文句となった。しかし、スミソニアン<sup>21</sup>の展示は致命的な打撃を受けた。上院は展示を批判する決議を満場一致で採択し、一九九五年一月に展示は取りやめとなった。その直後、あたかも示しあわせたかのように、一連の本や論文があらわれ、それによると、NASM論争において「記憶」の側に加担したものが、結局のところ誤った回想にふけていたのでないことが示された。

正統主義派の著作として、まず最たるトルーマン研究家であるロバート・H・フエレルの『ハリー・S・トルーマンの生涯』（一九九四年）とアロンゾ・L・ハンビーの『庶民の人——ハリー・S・トルーマンの生涯』（一九九五年）が挙げられる。両方とも広島原爆の決定に詳細な一章を割き、修正主義の主張、すなわち、日本は八月六日以前に降伏する用意があったという推定をはじめ、アメリカは原爆をソ連に対する外交的武器として用いたという説を論駁している。スタンレー・ワイントラープの『最後の大勝利——第二次世界大戦の終結、一九四五年七月・八月』（一九九五年）は、太平洋戦争の最後の月の展開を日毎に追っているが、最終的に原爆の使用を必要にした残酷な文脈を描き出している<sup>22</sup>。

こうした幅広い研究と同時に、広島原爆の決定に焦点をあてた研究、あるいはもっと狭く原爆決定の特定の局面を扱った研

究が著されたが、新研究を合わせると総じて修正主義の立場を粉砕するものであった。ロバート・ジェームズ・マドックスはその著『勝利のための武器——五〇年後からみたヒロシマ原爆決定』（一九九五年）のなかで、原爆外交説を説得的に打ち碎いた。彼は、原爆外交説が資料による証拠に基づくものではなく、歴史の記録の歪曲や根拠のない主張にすぎないことを説得的に示した。マドックスは、トルーマンが原爆を対ソ外交武器として使用したところか、むしろ逆にボツダム会議以前、さらに会議中もソ連との良好な関係を維持しようと努力したことを実証的に示した。マドックスはまた、「マジック」解説電報（とりわけ東郷茂徳外相と佐藤尚武駐ソ大使との間の往復電報）と「ウルトラ」解説によつて、日本は連合国の最小限の戦争目的に少しでも合致する条件で降伏する気は毛頭なかったこと、むしろ逆に、日本軍がアメリカの本土上陸を期して、頑強な準備を進めていることが如実に示された、と述べる。マドックスはまた、トルーマンと彼の助言者が日本本土上陸の場合、五〇万人がそれ以上の死傷者が出るという推定を見ており、そのように膨大な人命が失われることをトルーマンが恐れていたことを示す確かな証拠を提供した。ロバート・P・ニューマンは、その著『トルーマンとヒロシマの神話』のなかで、広島原爆の決定をトピック別に検討した。彼はそれぞれの章において、無条件降伏を要求するという政策、また日本に対して事前の原爆の非軍事的デモンストレーションをおこなわないという政策を擁護した。

修正主義の立場に対するもつとも徹底的な批判は、広島・長崎への原爆投下がなかったとしても、またソ連の参戦がなかったとしても、日本は「確実に一九四五年一月三十一日まで、そしておそらく一月一日までに降伏したであろう」という合衆国戦略爆撃調査団の主張をニューマンが完璧なまでに論破したところである。彼はそのため、戦略爆撃調査団が一九四五年、日本降伏後の数ヶ月の間、日本の当局者をインタビューした際の証言を再検討した。そしてこの証言を客観的に読めば、調査団がそれ自身の証拠を無視することによってのみ、原爆投下とソ連参戦がなくても日本は一九四五年に降伏したという結論を導き出せたと推定するほかない、とニューマンは論証する<sup>22</sup>。

他方アルペロヴィッツは、『原爆使用の決定とアメリカの神話の形成』（一九九五）を著すことで、ふたたび論争に加わった。この大部な本——二部構成で全八〇〇ページにわたり、七人の協力者の助力をえて書かれた——の書評は賛否両論だが、しばしば批判的であった。穏健な修正主義者であるJ・サミュエル・ウォーカーによる比較的好意的な書評でさえ、「この本が思慮深く、独創的で、魅力的であると言つても、私の意見では説得的と言ふことにはならない」と述べているのである。実際、この本の欠陥は、原爆の論争ではめつたにないことだが、ロバート・ジェームズ・マドックスもバートン・バインスタインも共に批判していることにもあらわれている。前者は、アルペロヴィッツの『原爆使用の決定』が、「旧著『原爆外交』とくらべ

てさえも、資料の操作が異様である」と書き、後者は「マジック」電報の「恣意的な使用」を批判し、「一九八五年の改訂版と非常に似た欠陥がある」と書いたのである。<sup>24)</sup>

### 死傷者の推定、日本の無条件降伏、「ダウンフォール」作戦

戦後になってからトルーマンとその助言者の何人かが、日本上陸作戦の際の推定死傷者をいちじるしく誇張していた——五〇万もしくはそれ以上に達するとされた——という主張は、何十年にわたり修正主義の議論の支柱の一つであった。<sup>25)</sup> この支柱は、軍事史家 D・M・ジァングレコの論文「日本上陸の際の推定死傷者、一九四五—一九四六年——作戦計画とその意味するもの」によって崩壊してしまった。*Journal of Military History* に掲載されたこの論文のなかで、ジァングレコは、軍事および民間の筋において、五〇万人にものはる高い推定数について信頼できる資料があったことを示した。同じく重要なことであるが、この高い推定数はトルーマンに達していたが、それは、軍部の高官と連絡を保っていた元大統領ハーバート・フーヴァーからもたらされたもので、その結果、トルーマンは一九四五年六月一八日、統合参謀本部および文官の最高助言者との重要な会合を開き、日本上陸の計画について討議した。要するに、ジァングレコが後に *Pacific Historical Review* の論

文で強調したように、トルーマンは計画されていた日本上陸の際の高い死傷者推定数を見ており、大きな懸念を抱いていたのである。それは戦後になってでっちあげたものではなかったとジァングレコは主張する。<sup>26)</sup>

また、無条件降伏の要求が戦争を長引かせたという説も、新しい研究では支持されない。ハーバート・ビックスは「日本の遅らされた降伏」と題する論文（一九九五年）のなかで、「太平洋戦争を長引かせたのは、無条件降伏という連合国の政策というよりも、日本の指導者の非現実的で無能な行動であった」と結論している。ヒロシマ以前の日本の指導者の頑迷さは、ローレンス・フリードマンとサキ・ドックリルの論文「ヒロシマ——ショックの戦略」の中でも言及されているが、この観点をもっとも徹底的かつ説得的に展開したのが、麻田貞雄の論文「原爆の衝撃と日本降伏の決定」（一九九八年）である。麻田は幅広く日本側の資料を渉猟して、アメリカが無条件降伏の要求を修正することを拒否したために、広島原爆以前に戦争を終結するチャンスを逸したという説を論破している。「もし降伏のチャンスが失われたのであれば、それは七月二六日、日本がポツダム宣言を受諾しなかったことであろう」と麻田は説く。<sup>27)</sup>

もちろん、一九九〇年代、修正主義者たちは沈黙を守っていたわけではない。たとえば、バートン・バーンスタインは「穏健な修正主義」の様々の側面を再主張する論文を発表した。<sup>28)</sup> J・サミュエル・ウォーカーもまた『迅速かつ完全なる壊滅

——トルーマンと原爆の対日使用（一九九七年）のなかで「穏健な修正主義」の簡潔な要約を提示した。ジョン・J・スケーツは『日本上陸——原爆以外の選択肢』（一九九四年）の中で、本土上陸の際の低めの推定死傷者数を挙げ、無条件降伏の要求は戦争を長引かせたと付け加えた。ジョン・D・チャペルは『原爆の前——アメリカ人は太平洋戦争の終結にいかに対応したのか』（一九九七年）の中で一九四五年、アメリカ人の厭戦気分がたかまり、死傷者が増加しつつあることに「指導者は」懸念を募らせていたさまを描いたが、彼もまた無条件降伏が戦争を長引かせたことに同意見だった。とは言え、証拠の重みは、ますます圧倒的に正統派の議論のほうに加担している。

一九九〇年代の新しい正統主義派の研究の流れは、リチャード・B・フランクの『ダウンフォール——日本帝国の終焉』の出版（一九九九年）で最高潮に達した。綿密で説得的なこの研究は、太平洋戦争の終結に関する決定的な研究としてただちに幅広く認められた。フランクは本書を書くにあたり、他の研究者の用いた証拠を集大成したうえ、日本語資料も参照することで、修正主義の立場のほとんど全局面を徹底的に論破した。計画されていた本土上陸に先立つ死傷者の推定に関する彼の包括的な検討は、高めの死傷者推定数を主張してきた歴史家を支持している。フランクは、無条件降伏の要求を緩和し、天皇制の保持を認める条件を含めたならば、戦争終結を早めることができたであろうという説を鋭く拒否する。J・サミュエル・ウォ

ーカーが『ダウンフォール』の書評で述べたように、フランクによる外交的・軍事的事実の分析は「修正主義者のもっとも大切にする議論——すなわち、日本は戦争終結を求めていたのに、アメリカは無条件降伏の要求の緩和を拒否することにより戦争を長引かせたという議論」——の核心に切り込むものであった。フランク自身、「原爆以外の選択肢で『早期に』戦争を終わらせることができる」という保証はなかった」と結論している。そして、一九四五年にアメリカの指導者がくだした「困難な決断」は正当化されたと付言するのである。<sup>30</sup>

## 二〇〇一年以降の論争

二一世紀が開幕すると、ジアン・ジェンティールはその著『戦略爆撃はどれほど効果的だったのか——第二次世界大戦からコソボまで』（二〇〇一年）の結論部分で、戦略爆撃調査団の報告に対する批判を敷衍した。ロバート・ニューマンは、取り止めになったNASM展示に焦点を当てながらも、『エノラ・ゲイと歴史の審判』（二〇〇四年）のなかで、ヒロシマ修正主義説への最新の批判を提供した。何と言っても一番注目を引いた本は、長谷川毅による『敵との競争——スターリン、トルーマンと日本降伏』（二〇〇五年）である。この本は修正主義説のある部分を支持し、他の部分を退けた。長谷川は、日本は八月六日—九日の出来事の以前に降伏する用意がなかったと述べた。し

かし同時に、彼はアルペロウィッツ説を支持して、アメリカは極東におけるソ連の軍事的増強が完成する以前に原爆を投下しようとして、ソ連と「競争」になったと述べ、それはソ連の対日参戦の先手を打って、日本に早期降伏を強いるためであったと論じた。長谷川はまた、ボツダム会談においてスターリンはアメリカが原爆を所有していると知り、アメリカが原爆で日本に降伏を強いない前にソ連は対日参戦しようとして「競争」したと付言した。さらに長谷川は、日本政府が降伏したのは、広島・長崎への原爆投下のためではなく、ソ連の参戦のためであったと主張した。

『敵との競争』について熱狂的な書評が最初数編あらわれたが、ただちに批判者たちは長谷川の説の主要な部分が証拠によつて裏づけられていないことを指摘した。たとえば、信用できる証拠は、トルーマンがソ連の対日参戦を望んでおり、八月八日にソ連が参戦したことを非常に喜んでいたことを圧倒的に示している。ソ連の軍事史および核政策の指導的権威であるデイヴィッド・ホロウエイによれば、ボツダム会議でスターリンが対日参戦すべく彼自身の「競争」を始めたという長谷川の議論は、ソ連側の資料によつて否定されている、という。そして麻田貞雄が強調するように、日本側の資料によれば、ついに日本に降伏を強いるうえで、明らかに原爆のほうがソ連参戦より重要な要因であった。

他方、ウィルソン・ミスキャンブル著の『ローズヴェルトか

らトルーマンへ——ボツダム、ヒロシマ、冷戦』（二〇〇七年）は「原爆外交説」に最後のとどめをさした。ミスキャンブルは、国務長官ジェームズ・バーンズが時たま言ったかもしれないことではなく、トルーマンとバーンズの実際の行動を周到に検討したのち、「原爆外交」といった奇抜な考えは、歴史のゴミ箱のなかに捨てなければならない、と結論をくだしている。

また二〇〇七年には、原爆論争の全体像を提示する三冊の書物があらわれた。そのうち二冊はアンソロジーである。長谷川毅編『太平洋戦争の終結——再検討』所収の論文は正統主義と修正主義の双方にまたがり、相対立する書き下ろしの論文を収録している。本書の約六〇パーセントまでも長谷川（イントロダクションと他の二章）とバーンスタイン（一九九八年以来のヒロシマ論争の概観と結論）が執筆している。他の寄稿者はリチャード・フランク、波多野澄雄、デイヴィッド・ホロウエイであり、それぞれ長谷川『敵との競争』の重要な部分に反論を加えている。さらに、フランクとホロウエイは修正主義の主要な議論を批判している。フランクは「決号」（アメリカ軍の本土上陸作戦に対する日本の決戦）に関する章で、九州上陸の最初の三〇日間だけで、アメリカ側の死者数は、戦争全体のもっとも死者の多い一ヶ月に達したであろうと主張している。フランクはまた、日本の最高戦争指導会議が、アメリカ側に受け入れられる最少の条件でも降伏に同意したであろうと、入手可能な資料は示していると指摘する。ホロウエイはソ連参戦に関する章で、一

九四五年四月から七月にかけて、日本の和平工作がいかに漠然としていたのか、そして日本政府では同意できる和平条件に、いかに達しえないでいたかということを描する<sup>36)</sup>。

長谷川は原爆とソ連参戦に関する章において、日本に降伏を強いるうえで原爆とソ連参戦とに同じウエイトを与え、原爆は一九四五年八月に日本を降伏させるために必要でなかったという修正主義の教義を自ら切り崩している。長谷川のこの章は、『敵との競争』で述べたことを弁護するのに焦点があてられている。「原爆とソ連参戦——どちらが日本の降伏決定の重要だったのか」は基本的にフランク、麻田、波多野に対する応答である。そして、ポツダム会談に始まりアメリカの原爆投下に至るまで、ソ連側では「競争」はなかったというホロウエイの主張に対して、長谷川は『敵との競争』での議論を繰り返す。いずれの場合でも、長谷川はそれを裏付ける証拠を示していない。『太平洋戦争の終結』の最終章は、バーンスタインのとりとめなく脱線の続くエッセイで、この論文集に所収されている緒研究を結び付けようとせず、またヒロシマ修正主義の運命を甦えさせようともしていない。

第二の論文集であるロバート・ジェイムズ・マドックス編『歴史のなかのヒロシマ——修正主義の神話』は、題名に示されるように修正主義に批判的な論文を収録したものである。マドックスの最新のアルペロウィッツ批判（「ガー・アルペロウィッツ——ヒロシマ修正主義のゴッドファーザー」）を除き、収録論文はすべ

て既出の論文である。麻田貞雄「原爆の衝撃と日本降伏の決定」は日本の降伏をもたらすうえで原爆が中心的な役割を果たしたことを説得的に示す。エドワード・ドウレーは、日本上陸のための情報予測——地獄の予告」のなかで、「ウルトラ」情報によって日本軍の九州防備の大々的な増強が裏付けられたので、アメリカ軍が上陸する際には如何に膨大な死傷者が出るについて、アメリカの作戦計画当局は深刻に危惧していたと述べる。D・M・ジャングレコは「二〇もの血なまぐさい沖縄戦と硫黄島戦——トルーマン大統領と日本上陸の際の推定死傷者数」のなかで、大統領が高めの死傷者の推定に懸念を抱いていたことを実証した。ロバート・P・ニューマンは「ヒロシマとヘンリー・ステイムソン批判」のなかで、いかにしてステイムソンと軍首脳部は、日本上陸とその最終的降伏の際の膨大な死傷者の推定数を割り出したのかを明らかにし、ステイムソンがその数字をみたのは、ほぼ確実であると述べている<sup>37)</sup>。

最後に私は「ヒロシマと原爆——コロンビア・ガイド」を出版した。この本では、まず歴史的な叙述として、アメリカの原爆製造計画、太平洋戦争の主要な戦い、一九四五年の春と夏の東京とワシントンでの政策決定について述べ、ヒロシマ論争の概観をたどった。この本は、読者がヒロシマ原爆投下決定に関する様々な対立意見を検討できるように、ほとんど二〇〇編の資料を収録している。そこに含まれるのは、必要なアメリカ人の日記と政府資料、九州における日本軍の増強に関する「ウル



トラ」情報報告、日本の外交機密の解説、戦後日本の当局者の尋問とインタビュー、そして重要な日本語資料の英訳である。<sup>(8)</sup>私は、こうした資料を注意深く検討することによって、修正主義者による原爆批判が真に「根本的に誤っている」ことを客観的な研究者に確信させるだろうと自信をもっている。

このエッセイは部分的に Michael Kort, ed, *The Columbia Guide to Hiroshima and the Bomb* (Columbia University Press, 2007) から翻案している。

- (1) Robert H. Ferrel, *Harry S. Truman and the Cold War Revisionists* (Columbia and London: University of Missouri Press, 2006), vii.
- (2) 大いへん<sup>14</sup> *Christian Century* LXII (August 29, 1945), 974-976.
- (3) Norman Cousins and Thomas K. Finletter, "A Beginning for Sanity," *Saturday Review of Literature* (June 15, 1946), 5-9.
- (4) P. M. S. Blackett, *Military and Political Consequences of Atomic Energy* (London: Tarnside Press, 1948); *Fear, War and the Bomb* (New York: McGraw-Hill, 1949), 134-136. (田中慎次郎)『恐怖・戦争・爆弾』(法政大学出版局「一九五一年」)。U.S. Strategic Bombing Survey, *Summary Report (Pacific War)* (Washington, D.C.: Government Printing Office, 1946), 22-26.
- (5) William Appleman Williams, *The Tragedy of American Diplomacy* (Cleveland: World Pub. Co, 1959). (高橋章・松田武・有賀貞訳)『アメリカ外交の悲劇』(御茶水書房「一九八六年」)。Denna Frank Flemming, *The Cold War and Its Origins*,

1917-1960, 2 vols (Garden City, N.Y.: Doubleday, 1961). (小幡操一訳)『現代国際政治史——冷たい戦争とその起源』(岩波書店「一九六六年」)。

- (6) Karl T. Compton, "If the Atomic Bomb Had Not Been Used," *Atlantic Monthly* (December 1946), 54-58; Henry L. Stimson, "The Decision to Use the Atomic Bomb," *Harper's* (February 1947), 97-107. 邦訳「原子爆弾使用の決定」リーナス・ス・ミンストン選書『第二次世界大戦秘話』。Henry L. Stimson and McGeorge Bundy, *On Active Service in War and Peace* (New York: Harper and Brothers, 1948).
- (7) Louis Morton, "The Decision to Use the Atomic Bomb," *Foreign Affairs* 25, 2 (January 1957), 334-353. (大津恵一訳)「広島原爆投下の真相」(『中央公論』一九五七年九月号)。Samuel Eliot Morison, "Why Japan Surrendered," *Atlantic Monthly* (October 1960), 41-47.
- (8) Herbert Feis, *Japan Subdued: The Atomic Bomb and the End of the Pacific War* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1961).
- (9) Feis, *The Atomic Bomb and the End of World War II* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1966). (佐藤英一ほか訳)『原爆と第二次世界大戦の終結』(南窓社「一九七四年」)。
- (10) Leon Giovant and Fred Freed, *The Decision to Drop the Bomb* (New York: Coward, McCann, 1965). (堀江芳孝訳)『原爆投下決定』(原書房「一九六七年」)。William Craig, *The Fall of Japan* (London: Widenfield and Nicolson, 1968). (浦松佐美太郎訳)『大日本帝国の崩壊』(河出書房「一九六八年」)。
- Lester Brooks, *Behind Japan's Surrender: The Secret Struggle That Ended an Empire* (New York: McGraw-Hill,

- 1968). 井上勇訳『終戦秘史——二つの帝国を終わらせた秘密闘争』(時事通信社、一九六八年)。
- (11) Robert J. C. Butow, *Japan's Decision to Surrender* (Stanford: Stanford University Press, 1954), 228-233. (大井篤訳)『終戦外史——無条件降伏までの経緯』(時事通信社、一九五八年)。
- (12) Gar Alperovitz, *Atomic Diplomacy: Hiroshima and Potsdam: The Use of the Atomic Bomb and the American Confrontation with the Soviet Power* (New York: Simon and Schuster, 1965), 179-185, 239-240.
- (13) Robert James Maddox, *The New Left and the Origins of the Cold War* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1973), 63-78. See also Maddox, "Atomic Diplomacy: A Study in Creative Writing," *Journal of American History* 59 (March 1973), 925-934.
- (14) Martin Sherwin, *A World Destroyed: The Atomic Bomb and the Grand Alliance* (New York: Vintage Books, 1975), 198. 雑誌 *A World Destroyed: Hiroshima and the Origins of Arms Race* (New York, 1987). (加藤幹雄訳)『破壊への道程——原爆と第二次世界大戦』(トビスブリタニカ、一九七八年)。
- (15) Gregg Herkin, *The Winning Weapon: The Atomic Bomb and the Cold War, 1945-1950* (New York: Vintage), 44-45; Robert Messer, *The End of an Alliance: James Byrnes, Roosevelt, Truman, And the Origins of the Cold War* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1982), especially pages 71-114; Michael S. Sherry, *The Rise of American Air Power: The Creation of Armageddon* (New Haven: Yale University Press, 1987). Leon V. Sigal, *Fighting to a Finish: The Politics of War Termination in the United States and Japan, 1945* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1988), 208-209, 278-279.
- (16) Alperovitz, *Atomic Diplomacy*, expanded and updated version (New York: Penguin Books, 1985).
- (17) Lisle A. Rose, *Dubious Victory: The Atomic Bomb and the End of the War in the Pacific* (Kent, OH: Kent State University Press, 1973), 158-160, 185-187, 215-217, 363-367.
- (18) Barton J. Bernstein, "Roosevelt, Truman, and the Atomic Bomb: A Reinterpretation, *Political Science Quarterly* 90 (Spring, 1975), 23-69; "A Postwar Myth: 500,000 Lives Saved," *The Bulletin of Atomic Scientists* (June-July 1985), 38-40; "Compelling Japan's Surrender Without the A-Bomb, Soviet Entry, or Invasions: Reconsidering the U.S. Bombing Survey's Early Surrender Counterfactual," *Journal of Strategic Studies* 18, 2 (June 1995), 138.
- (19) Edward Drea, *MacArthur's ULTRA: Codebreaking and the War Against Japan, 1942-1945* (Lawrence: University Press of Kansas, 1992), 202-225.
- (20) N.A.S.M.の台本と学問的評価にまつものことも優れた全体像を Robert P. Newman, *The Enola Gay and the Count of History* (New York: Peter Lang, 2004). 日本語訳は『ヒロシマの歴史と記憶』Michael Hogan, "The Enola Gay Controversy: History, Memory, and the Politics of Presentation," in *Hiroshima in History and Memory*, ed Michael Hogan (New York: Cambridge University Press, 1996) を参照。『夜襲』に『ヒロシマの歴史』"The Crossroads: The End of World War II, the Atomic Bomb, and the Origins of the Cold War", Philip Noble, ed., *Judgment at Smithsonian* (New York: Marlow and

Company, 1995), 3. その抄訳として『三國隆志ほか訳』『暴れた原爆展——スミ・ニ・ニ・ニの抵抗と挫折』(五月書房、一九九五年)。

- (21) Robert H. Ferrell, *Harry S. Truman: A Life* (Columbia and London: University of Missouri Press, 1994), 198–217. Alonzo L. Hamby, *Man of the People: A Life of Harry S. Truman* (New York and Oxford: Oxford University Press, 1995), 312–337; Stanley Weintraub, *The Last Great Victory: The End of World War II, July/August 1945* (Cambridge: Cambridge and New York: Cambridge University Press, 1995).

- (22) Robert James Maddox, *Weapons for Victory: The Hiroshima Decision Fifty Years Later* (Columbia: University of Missouri Press, 1995); Robert P. Newman, *Truman and the Hiroshima Cult* (East Lansing: Michigan State University Press, 1995), especially pages 33–56. See also Newman, “Ending the Pacific War with Japan: Paul Nitze’s ‘Early Surrender’ Counterfactual,” *Pacific Historical Review* 64 (May 1995), 167–194. ハーランド・ハーンスタインは、一九四五年一月以前に日本は降伏したであろうという略爆撃調査団の主張は、「[この調査団自身の調査に]もついても裏づけられない」と書いた。一九九七年ジマ・ベンテールは調査団報告を綿密に検討し「その中にいくつかの批判があった。Bernstein, “Compelling Japan’s Surrender,” 127–28 参照。Gian Peri Gentile, “Advocacy or Assessment: The United States Strategic Bombing Survey of Germany and Japan,” *Pacific Historical Review* 66, 1 (February 1997), 53–79. 一九九五年に出版されたもう一つの重要な研究は「軍事史家によるものベトナムの原爆投下の決定を支持しつつも」Thomas B. Allen and Norman Polner, *Code-Name*

*Downfall: The Secret Plan to Invade Japan—and Why Truman Dropped the Bomb* (New York and London: Simon Schuster, 1995). (栗山洋児訳)『日本殲滅——日本本土作戦の全貌』(光人社、一九九五年)。

- (23) Gar Alperovitz, *The Decision to Use the Atomic Bomb and the Architecture of an American Myth* (New York: Knopf, 1995). (鈴木俊彦ほか訳)『原爆投下と米国の伝説』(ちくま出版、一九九五年) 十二―一六。J. Samuel Walker, *Prompt and Uther Destruction: Truman and the Use of the Atomic Bombs Against Japan* (Chapel Hill and London: University of North Carolina Press, 1997), 132. 林義勝監訳『原爆投下と米国の伝説』(筑波社、二〇〇〇年)。

- (24) Maddox, “Gar Alperovitz: Godfather of Hiroshima Revisionism,” in *Hiroshima in History: The Myths of Revisionism*, ed. Robert James Maddox (Columbia and London: University of Missouri Press, 2007), 14; Bernstein, “The Interpretive Problems of Japan’s 1945 Surrender,” in *The End of the War in the Pacific: Reappraisals*, ed. Tsuyoshi Hasegawa (Stanford: Stanford University Press, 2007), 25.

- (25) ハンベック Bernstein, “A Postwar Myth: 500,000 Lives Saved” を訳す。

- (26) D. M. Giangreco, “Casualty Projections for the U. S. Invasion of Japan, 1945–1946: Planning and Policy Implications,” *The Journal of Military History* 61, 3 (July 1997), 521–581. 死者の推定数に「ミドルマン」が知れている。彼が「ミドルマン」反応したことが「ミドルマン」Giangreco, “A Score of Bloody Okinawas and Two Jims: President Truman and Casualty Estimates for the Invasion of Japan,” *Pacific Historical*

- Review 72, 1 (February 2003), 93-132.
- (27) Herbert Bix, "Japan's Delayed Surrender: A Reinterpretation," *Diplomatic History* 19, 2 (Spring 1996), 223. Bix, *Hirohito and the Making of Modern Japan* (New York: Harper-Collins, 2000), 533-579, 560-572.
- (28) Lawrence Freedman and Saki Dockrill, "Hiroshima: A Strategy of Shock," in *From Pearl Harbor to Hiroshima: The Second World War, 1941-1945*, ed. Saki Dockrill (New York: St. Martin's Press, 1994), 191-212; Sadao Asada, "The Shock of the Atomic Bomb and Japan's Decision to Surrender: A Reconsideration," *Pacific Historical Review* 67, 4 (November 1986), 477-52. 邦文版『麻田「原爆の衝撃と降伏の決定」』鎌倉千博ほか編『太平洋戦争の終結——ア・ペン・太平洋の戦後形成』(柏書房、一九九七年)一九五—二二二ページ。英文版では史学史的な議論と主要資料の解説を含んでいる。
- (29) Bernstein, "The Atomic Bombings Reconsidered," *Foreign Affairs* 74, 1 (January-February 1995), 135-152. 邦訳『検証 原爆投下決定までの三日』(中央公論) (一九九五年二月)三八七—四〇四ページ。"Understanding the Atomic Bomb and Japan's Surrender: Missed Opportunities, Little Known Near Disasters, and Modern Memory," *Diplomatic History* 19, 2 (Spring 1995), 227-273.
- (30) J. Samuel Walker, "Bomb! Bomb!" *New York Times Book Review* (December 12, 1999), 35; John Ray Skates, *The Invasion of Japan: Alternative to the Bomb* (Columbia: University of South Carolina Press, 1994); John D. Chappell, *Before the Bomb: America Approached the End of the Pacific War* (Lexington: University Press of Kentucky, 1997).
- (31) Richard B. Frank, *Douglas: The End of the Japanese Imperial Empire* (New York: Random House, 1999).
- (32) Gian P. Gentile, *How Effective Is Strategic Bombing: Lesson Learned From World War to Kosovo* (New York: New York University Press, 2004); Robert P. Newman, *The Enola Gay and the Court of History* (New York: Peter Lang, 2004).
- (33) Tsuyoshi Hasegawa, *Racing the Enemy: Stalin, Truman, and the Surrender of Japan* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2005). 邦文版『暗闘——スターリン、レーニンと日本降伏』(中央公論社、二〇〇六年)。
- (34) Michael Kort, "Racing the Enemy: A Critical Outlook," *Historically Speaking*, January/February 2006, 22-24; David Holloway, "Jockeying the Position in the Postwar World: Soviet Entry into the War with Japan in August 1945," in *The End of the Pacific War*, 145-188; Sadao Asada, review of *Racing the Enemy in The Journal of Strategic Studies* 29, 1 (February 2006), 169-171, and his exchange with Hasegawa, *idem*, 29, 3 (June 2006), 567-569.
- (35) Wilson Miscamble, C. S. C., *From Roosevelt to Truman: Potsdam, Hiroshima, and the Cold War* (Cambridge and New York: Cambridge University Press, 2007), 325. See also Maddox, "Give Me That Old Time Revisionism," *Continuity*, Spring 2003, 121-145.
- (36) Tsuyoshi Hasegawa, ed., *The End of the Pacific War: Reappraisals* (Stanford: Stanford University Press, 2007). See Richard Frank, "Ketsu Go: Japanese Political and Military Strategy in 1945," 65-94; Sumio Hatano, "The Atomic Bombs and Soviet Entry in the War: Of Equal Importance," 95-112.

て最近の論文が四編ある。

Davis Holloway, "Jockeying for Position in the Postwar World: Soviet Entry into the War with Japan in August 1945," 144-188. フランソワ・ジャコブ著、高橋洋子訳、谷川弘之編、『The Atomic Bomb and the Soviet Invasion: Which Was More Important in Japan's Decision to Surrender?』113-144. フロマン・ジャコブ著、谷川弘之訳、『The Soviet Factor in Ending the Pacific War: From Neutrality Pact to Soviet Entry into the War in August 1945』189-227.

(25) Robert James Maddox, ed., *Hiroshima as History: The Myths of Revisionism* (Columbia and London: University of Missouri Press, 2007).

(28) Michael Kort, *The Columbia Guide to Hiroshima and the Bomb* (New York: Columbia University Press, 2007). シロニイ論争の狭い側面を検討する書物。シロニイ Michael D. Gordin, *Five Days in August: How World War II Became a Nuclear War* (Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2007).

本論文は“The Historiography of Hiroshima: Rise and Fall of Revisionism,” *The New England Journal of History*, Volume 64 (Fall 2007) に掲げられ、加筆訂正を要するところがある。

## 執筆者紹介

ニューヨーク大学で Ph. D. (ロンドン史) 取得。現在ボストン大学教授 (社会科学)。主著として『*The Soviet Colossus: History and Aftermath*』(Sharpe, New York, 2006); 『*The Columbia Guide to the Cold War*』(Columbia University Press, 1998); 『*The Columbia Guide to Hiroshima and the Bomb*』(Columbia University Press, 2007); 『*A Brief History of Russia*』(Facts on File, New York, 2008)。そのほか「原爆投下問題」に関